

児童養護施設における高年齢児童への処遇の現状について

佐藤 由香理
(児童養護施設 仙台天使園)

大橋 智樹
(宮城学院女子大学)

【背景と目的】

児童養護施設において、低年齢児童は生活全般に関して手が掛かかることが多く、必然的に職員と接する時間が多くなる。その反面、ある程度自立している高年齢児童は、低年齢児に比べ職員と関わる時間が少なくなっているのではないかと思われる。このような高年齢児童に対する処遇の実態を調査し、問題点を明らかにする。

【方法】

質問紙調査(施設が定期的に行っている「人権アンケート」の集計に基づく)

・質問紙の内容

(1) 今困っていること、聞いてほしいことはありますか

(2) こうだったら良いのになと思うことはありますか

非構造的ヒアリング

・対象者：高校生数名、担当職員数名

【結果】

高年齢児童へのインタビューと質問紙調査

(1) 小学生ばかりお世話して中・高生には手をかけてくれない。もっと面倒を見てほしい。(2) 小学生中心で中・高生はほおっておくという感じが先生方から読み取れる。(3) 学校の先生みたいに、いつも忙しそうで気を遣う。(4) 先生たちは毎日忙しくて子ども達と話をする時間がなかなか取れていないので、少しでも子どもと話をする形をとればいい。(5) 話しやすい雰囲気を作って欲しい。など、低年齢児童に比べ職員との関わりが少なく、もっと自分たちにも手をかけて欲しいと思っていることが明らかになった。

担当職員へのインタビュー

(1) 実際、高校生より小学生と関わりを持つ時間は多いと思う(比率にすると2:8くらい)(2) 小学生は帰園直後から、宿題、明日の準備、夕食、入浴、就寝とあらゆる面で手がかかる。特に平日は、それに追われて、高校生が来て後回しや対応できないという状況。(3) 高校生に関しては、意識的に関わろうと思わないと関われない。など、低年齢児童の対応に追われ、高年齢児童とはあまり関わりを持っていないと職員自身も実感しているようである。

【考察】

このような現状の要因の一つには、児童の人数に対して職員の人数不足があげられる。その背景には、平成8年以降、入所児童数が増加し続けているにもかかわらず、職員の配置基準(児童福祉施設最低基準第42条、小学生以上の児童に対して6:1)は昭和51年から30年間も変えられていないということもあるのではないかと考えられる。生活全般において手のかかる低年齢児童に時間が費やされることはやむを得ないといえるかもしれない。しかし、インタビューからは、高年齢児童は低年齢児童とは異なる問題や悩みを抱えている可能性が示唆され、さらに、これらの問題は低年齢児童に比べて顕在化しにくい点も指摘でき、本来は低年齢児童と同等、もしくは、より細やかなケアが必要であると思われる。また、児童養護施設に期待される役割としては、単に養育するというだけでなく、虐待等の家庭環境からの育ち直しという目的も含まれているため、施設内での生活の内容(基本的生活、大人との関わり等)が重要であると思われる。そこで具体的な体験がその後の児童の人格形成や社会適応に大きく影響されると考えられる。虐待等で歪められた人間関係を再構築していくためには、より個別にそれぞれのケースに沿った細やかな対応が望まれるが、実際問題、養護施設というある程度制限が設けられてしまう場において、それは容易な事ではない。しかし、可能な限りそのような関わりができるようシステムや職員の知識、技術向上のための研修等、早急な改善策を検討することが求められると思われる。